ズムトール氏追想

松　原　秀　一

フェリックス・ルコワ先生の奥様からズムトール氏の一周忌の一月十一日の夕方に La Guirlande pour Paul Zumthor と云う追憶のために詩を捧げる会があると連絡された。サン・ジェルマン・デ・プレ通りからサン・ペール通りにセーヌ河に向かって入り，左側のヴェルヌイユ通りを辿って行くが，小暗くもなってくる時間で，云われた「メゾン・デ・ゼクリヴァン」らしいものが見えて来ない。間違ったかと思って進んで行く中に左側に明かりの付いた小さな店があり，あとはひっそり暗い町並みなのでそこらしい。近付いていくとカフェのようだが開いてはいなかった。そこが中庭の入り口になっていて，その奥の建物の一階が明るく数人の人が喋っている。入っていくと受け付けの奥のサロンに椅子が並べてあって，前に細長い机が二つ並んでいる。席に座って居る人もあるので，電話のあったルコワ夫人の分も確保して，座ると脇に思い掛けずもニゼ書店で働いていて顔見知りの女性が「今晩は」と挨拶する。お互いどうしてこの人がここに，という感じであった。隣の部屋からかつてルコワ先生のクラスで一緒だったセルキリーニ・トウレ夫人が椅子を運んで現れ，後からセルキリーニ氏が現れて仲良さそうに話している。二人は離婚し互いに再婚している筈だと思っているうちにセルキリーニ氏が気が付いて挨拶に来る。「良く来てくれた。ズムトールは日本にも行ったんだってね」と話しているうちにコレージュ・ド・フランスに着任したばかりのミシェル・ザンク氏など次々に入ってきてセルキリーニ氏は対応に忙しくなった。

ルコワ夫人も開会直前に到着され，セルキリーニ氏の開会の辞と正面に５人ならんで座っている主催者側の紹介があって，向かって左端に座っているのがジャック・ルーボーだと知った。50名ばかりの集会だったが，司会とルーボー氏の挨拶からセルキリーニ氏が Oulipo (Ouvroir de littérature potentielle) に持ち掛けて開くことになったらしい。先ずセルキリーニ・トウレ夫人がズムトール氏の詩を朗読し，前に並んでいるジャック・ルーボー氏，ブラッフォール氏が続いて数編を読むと会場内のザンク氏がポケットから紙片を取り出し，朗読を続けた。ズムトール氏の小説は三冊持っているが，詩を書いていることは知らなかった。中世詩のレトリックに焦点があり，早くもクルチウスの『中世ラテン世界とヨーロッパ文学』の行き届いた書評を *Zeitschrift für Romanischen Philologie* に寄せ，GRLMA の「修辞学」の項目を託されたり，Grands Rhétoriqueurs の選集を作ったりした氏が詩作を試み，ウリポの人々と関係があったのは考えてみれば自然である。

続いて前に並んだ人達がズムトール氏に捧げる自作の朗読を次々としたが，ズムトール氏の諸著作のタイトルを読み込んだセルキリーニ氏の「バラード」やブルフォール氏のメトロの駅名を使った詩などは辛うじて付いて行けたが，ルーボー氏や女流詩人ミシェル・グランゴールの詩などはウーリピアンの手の込んだ物らしく，とても聞いて分かると云う訳にはいかなかった。それにしても中世学者として我々が知っているザンク氏，セルキリーニ氏，ザンク氏のコレージュ・ド・フランス教授就任の後，ソルボンヌのザンク氏の後任となったセルキリーニ・トウレ夫人などが詩作をし，現代詩人たちと交流があるのは如何にも中世文学が詩人の感性で活きている感じで感銘深いものであった。ザンク氏の諸著作にしてもセルキリーニ・トウレ夫人の研究，特に *La Couleur de la Mélancolie*, Hatier, 1993 など感性の豊かさ，瑞々しさを感じさせる。朗読会に続いて隣の広間でプロ・ヘルヴェティア提供のスイスの白葡萄酒でパーティーとなった。

去年ズムトール氏の亡くなった直後にソルボンヌ広場のプレス・ユニヴェルシテール書店が飾り窓にズムトール氏の写真を飾り著書を並べて弔意を表したのを写真に撮ってあったのでミシェル・ザンク氏に記念にと渡すと，ズムトール氏のお嬢さんが居るからと紹介してくれた。ズムトール氏は三度結婚しているのでどの夫人のお嬢さんか分からなかったがAliette Zumthor-Sallèeというお嬢さんに同じ写真と丁度前日届いた原野昇氏のズムトール氏のネクロロジイの載っている広島大フランス文学研究会の雑誌を渡すことが出来た。オリエ夫人はカナダのモントリオル大の学期中で来られないとのことだった。中世写本研究所のロマンス語部長をしておられるアズノール夫人の顔が見えた。夫人はエコール・プラティークのロマンス語文献学講座教授でモンフラン氏の後任者でもある。和気藹々のいかにもズムトール氏に相応しい会であった。今年の12月にはザンク氏の司会でズムトール氏を巡るターブル・ロンドも開かれる予定があるのもズムトール氏の人柄であろう。

ズムトール氏の名前を初めて知ったのは未だ学生のころワルトブルグ氏とズムトール氏共著の *La Syntaxe du français contemporain* であった。この序文に外国でフランス語を習得したものがフランスに実際来てみるとそこで話されているのがフランス語と思えないに違いないというように書いてあって，そんなにあって，そんなに口語は違うのかと不安になったことを思い出す。

初めて会ったのは1969年でソルボンヌ広場で待ち合わせたのであった。それ以前にズムトール氏の *La Langue et techniques poétiques à l'époque romane (XIe- XIIIe siècle)* 1963を入手し大変刺激を受け，ズムトール氏の著作の目録を作ったりし，学内の雑誌に書評を書くと同時にフローニンゲン大学からアムステルダム大学に移られたばかりの氏に手紙とこの著作目録を送ってから二・三年文通はしていたが，筆者が渡辺一夫先生のお口添えでパリの東洋語学校に教えに行く機会を得て八年

振りでパリに戻った折，ズムトール氏もヴァンセンヌ校に教えに来て居られ，初めて会うことが出来たのであった。お互いに顔を知らないので，ロマニア誌を手に持つのを目印にしてソルボンヌ広場のカフェで会ったのが初対面であった。カルディナル・ルモワヌ通りに小さなアパートを持っておられ，そこに伺ったことも思い出す。佐藤輝夫氏のメランジュに寄稿を依頼したりしたのもその頃のことであった。

ヴァンセンヌ校では68年の大学騒動の後，新しい試みも多く行われ実験的に面白い学部であったが平静に戻ったフランスでは物議を醸すことも多々あり，ズムトール氏がスイス国籍であることも障害となって面白くないこともあったらしい。筆者が帰国した1971年にはカナダに移られ，モントリオルから手紙が来るようになった。

色々な曲折を経て訪日が実現したのは1979年であった。夫人はカナダの授業の関係で後から来られ，名古屋で講演と授業をされたズムトール氏と合流されたのだが，箱崎まで迎えに出た筆者はパリでの経験からオリエ夫人をTralili誌の抜き刷りを手にして迎え，此の赤い表紙に夫人は直ぐ分かってほっとした顔をされたことも思い出す。御夫妻の訪日には山田爵先生にお願いして，東大から学術振興会に招聘の申請を出して頂いた。山田先生も発起人に加わって頂いた佐藤輝夫，有永弘人，新村猛先生も亡くなられ，東京でのズムトール氏のセミナーに熱心に参加された川本茂雄先生も亡くなられている。東京のセミナーではGrands Rhétoriqueursも取り上げられプリント作りに苦労した。後に10/18叢書のBibliothèque Médiévaleにズムトール氏による選集が出ることになる。国際文化会館でのセミナーの最終日に六本木の「きときと」と云う小料理屋で打ち上げの会食を行ったとき，此の金沢の言葉という「きときと」に付いて楽しそうにズムトール氏に解説をしておられた川本先生の姿が目に浮かぶ。

ズムトール氏は各地のセミナーも含めて九州から北海道まで講演旅行をされた。旅行はちっとも苦にされず，各地を楽しまれたようであった。筆者の家で食事をされた時も南米の各地やインド旅行など広い旅行の経験談を次々とされたが，オーストラリアに野生の駱駝が居る話になり，何故駱駝が居るかを説明されたのが思い出される。この時スイスの葡萄酒の話になり「窓ガラスの掃除に丁度良い位のものだ」と云われたのを追悼会で白葡萄酒を飲みながら思い出した。この葡萄酒はフランスのものであった。東京では当時有楽町にあった東宝寄席にお供したが，色物はとにかく落語，漫才まで熱心にメモをとりながら最後まで付き合われた。後にこれはNouvelle NRFに載った落語論に結晶するが，当時から口承芸術に関心は向いていたのであろう。

夫妻はシベリア鉄道でヨーロッパに戻られたので福本直之氏と横浜の波止場まで送りに行ったが，日本での記録一切や本などは直接カナダに送られた。検閲の

厳しいことを見越してのことで，旅慣れたところを見せられていた。

氏の活躍は広がるばかりであったが先端的な雑誌 *Tel Quel* に次々と寄稿される頃から文体が変わり付いて行けなくなり文通もおろそかになっていった。1993年に退職して5月末にパリに戻って暫くしてサン・ミシェル通りのジベール書店に久しぶりに入り，出ようと階段を降り掛けるとエレヴェーターで上がって来たのがズムトール氏であった。夏でパリに戻って来たがリモージュ地方の別荘に行く所だとのことであった。翌年の夏にもリュ・デ・ゼコルを歩いて行くと，今度は夫妻で歩いて来られるのに出会った。二・三日後にフローニンゲンであるレンセスヴァルス学会に行くと言う。筆者も会員であるがフローニンゲンには数年前に「狐学会」で行ったばかりでもあり，行く予定は無かった。秋からはオリエ夫人がサバティカルなので久しぶりでパリで暮らすから，ゆっくり会おうと別れたのが最後の会見となってしまった。年末になっても音沙汰も無いので連絡しなくてはと思いつつ暮らしている中に訃報に接することになって仕舞ったのであった。フローニンゲンの学会に出た大高順雄氏と小川直之氏がズムトール氏にあった最後の日本人となった。穏やかで気さくな教養人であった。

筆者の手許に30通程の手紙が残されているが，遠国の若者にこまごまと情報を伝え，時にはシングルスペースでタイプ4枚もの長文の手紙を呉れたのであった。伸びやかな筆跡の手紙もあり，走り書きの短簡もある。折りがあればオリエ夫人の許可を得て，たとえ一部でも紹介したいものである。